

はじめに

踊りという魔力に心も体も動かされて六十余年がたちます。ところがこの歳月を芸という道として思い直しますと、まだまだ修行の過程でしかありません。

私はずいぶん幼いころより大病を繰り返しました。はたしてこの先、何歳まで踊るのか、いえ踊れるのか…。そんなことはわかりませんが、新しく建て替えられた五代目歌舞伎座の舞台でまた再び自分の会をさせていただくのをひとつの機と思ひ、永年書きためてきた私の思いを整理し、新たに加え、一冊の本としてまとめたいという気持ち湧き上がりました。

本書の刊行に際し、大谷信義会長さまよりお言葉をたまわりましたこと、ありがたいことと感謝申し上げます。

この道を歩み始めてより今日までお教をいただいた偉大な先人達、戦後というひとつのきちんとした時代、そして、私の全身を通して心まで届いたこと、出来事のさまざまが三年とい

う年月を経て、ここにようやく本という形にまとまりました。華やかで凛としていたあの時代、特に芸の教えには厳しい礼儀作法がありました。

何事も偶然の不思議、森羅万象のなかでの巡り逢い…。そうした私の思いのいかほどをお伝えできるでしょうか。まことに訥々とはありますが、お目にとめていただける幸せを励みとして、「舞をどり」の終わりにこの道を精進したいと肝に銘じております。

舞台
梅津貴昶
の世界



長唄「茨木」 伯母真柴 国立能楽堂



長唄「船弁慶」 平知盛の霊 国立能楽堂



長唄「春興鏡獅子」 後シテ獅子の舞 国立能楽堂

清元「保名」
歌舞伎座



荻江「鐘の岬」
歌舞伎座









地唄「雪」
ル・テアトル銀座



竹本長唄「京鹿子娘道成寺」
 白拍子花子 道行より鐘入りまで
 四代目、五代目歌舞伎座

